

【暮らしの学び舎 Salmatt 企画】家庭科で育つ子どもと私の Well-being

第 3 回 20260621(日)10:00-12:00

2026 年度「暮らしの学び舎 Salmatt 企画」家庭科で育つ子どもと私の Well-being の第3回「羊毛フェルトで教材づくり体験」を6月21日(日)10時から、Salmatt 工房で行いました。暮らしの学び舎企画初の対面活動で、スタッフと事前打ち合わせを何度も行い、準備を行ってきました。当日はスタッフも含めて11名での活動となりました。第1回、第2回の振り返りとともに、鈴木から活動の趣旨と講師の紹介等を行った後、製作活動に入りました。講師のSさん発案のモチーフ「オオサンショウウオ」に表情と柄を付けるという作業では、思いもかけないユニークで個性あるサンショウウオが次々に生まれ、つくりながら歓声が上がりました。製作に没頭しつつも、多様な立場の参加者が、日々のワークとライフの現状、徒然に思うこと等語り合いました。短い時間でしたが、皆さんが帰路につく前に、「楽しかった。こんな時間は久しぶりだった。」と笑顔で帰っていく姿をうれしく思いました。忙しくストレスも少なくないであろう日々の中で、ゆとりとこだわりをもてたことへのささやかな自負、私自身もそれを感じました。

事後アンケートの記述には、「初めてでも理想の形に仕上げられて大満足」「久しぶりの手仕事を心地よく楽しめた」と、ものづくりの充実感を喜ぶ声が多く寄せられました。また、運営側の家庭科教育に対する熱意や優しい声かけが嬉しかったという意見や、他の参加者の作品や幅広い世代との会話に刺激を受けたという声もありました。今後の要望としては、継続的な対面企画を望む声が挙がっています。さらに、今回のように、手を動かしながら学ぶスタイルをベースに、刺繍などの「縫い物」への挑戦を希望する具体的なリクエストも寄せられました。次回企画の参考にしたいと思います。

プログラムは次の通りでした。

9:30~10:00(30分) 受付

10:00~10:20(20分) 趣旨説明, 参加者自己紹介, 豊栄ウール工房と羊毛の特徴

10:20~11:30(70分) 講師による教材の意義と作り方の説明

11:30~12:00(30分) 交流の時間, 写真撮影, アンケート

パワーポイントの資料ファイルをご覧ください。資料ファイルの最後にも挿入してありますが、今、家庭科で「手を使ってつくること」の意義をまとめたコラム(東京書籍監修 冊子「家庭科の学習を生かして持続可能な社会へ 衣生活編」より)を紹介します。「便利さ」「コスパ」「タイパ」が奪う私たちの生活の「こだわり」や「うるおい」を再考し実現することは、今の時代だからこそ求められているだと思います。

持続可能な衣生活をつくるために

(令和 6 年 10 月 鈴木明子)

人を取り巻く環境の中で最も身近な存在である布は、家庭科で扱う代表的な教材の一つです。それは、私たちの身体や生活を快適かつ安全に守るとともに、見たり触れたりすることによって、ワクワクしたり心地よさや安心感を与えてくれたりするものです。

現在は簡単に安価に購入できる布や布製品ですが、それらが私たちの手元に届くまでの、多くの人の思いや研究開発や生産プロセスを考えてみることも興味深いことです。そこでは、まず、過剰生産に伴う環境問題や、厳しい労働環境に置かれた他国の人々の人権に関わる現代的課題が思い浮かびます。さらに歴史をさかのぼると、人が生活し、人としての尊厳を守るために行ってきた素朴なものづくりに端を発し、その技術を継承し創造してきた経緯に気づきます。そのような科学と文化の発展の中で、現代に生きる者として、先人が創り上げた伝統文化としての

布の存在に恩恵を被っていることに感謝と畏敬の念を持たざるをえません。そして、持続可能な衣生活、衣生活文化を継承する消費者としての責任にも思い至ります。

日本には多くの伝統的な織物があります。どの織物にも地域の自然や特徴を生かして、人から人へ丁寧に受け継がれた技術があります。それは、人が厳しい自然環境の中で生きるために、また社会的経済的に自立した生活を保障するために必要であったと言えるでしょう。一方で労働として強いられた作業であっても、一つ一つの工程に求められる技能を丁寧に言い、それによって到達する価値ある完成品との出会いに心躍らせ、ささやかな自己成長の楽しみを感じてきた一人一人の思いが、その伝統文化や技術の継承につながったことは間違いないと思われます。

学校教育の中で、このような伝統文化継承の価値を学ぶ機会はいくつとありません。ただ、家庭科で、自分の手で道具を使うことを通して、一つ一つの動作や工程に含まれる意味を見出すこと、そして自律的な動作の積み重ねによって自分だけのものをつくり出す喜びと達成感を体感できることは、認識面での学びにとどまらない身体感覚を伴った学びにつながり、独自の深い学びを保障しています。それは持続可能な生活をつくる大切さを学ぶ基盤となります。

このような活動は、学校外活動としても盛んに行われるようになってきました。しかしながら、その体験の意味や大切さを客観的に捉えて、子供たち自身の文化創造の道筋をつくっていくのは学校教育の役目だと思います。先生方が子供たちとともに身近な布や伝統文化としての布に触れ、その継承に携わっている方々の思いに耳を傾け、未来への展望を持って、家庭科の教材研究を進めることが求められています。現代生活では不要になったと感じる技能や技術を、学びや成長を促す資源として見つめ直し、生活の豊かさを改めて多様な観点から再考することが、子供の成長にとって意味があると、大人が気づく必要があるでしょう。子供たちのドキドキするような思いを大切に、もっとこんなものが作ってみたいと思うような授業にするために、先生方が伝統文化としての布に出会い、それを教材として利用する楽しさを実感していただくことをお勧めします。